【豊かな体験活動　推進校】

そばと大豆の生産・加工　体験活動

阿武町立福賀中学校

学　校　の　概　要

①　学校規模

○　学級数：３学級

○　生徒数：１５人

○　教職員数：７人

○　活動の対象学年：全学年　１５人

②　体験活動の観点などからみた学校環境

○　阿武郡北部の山間部に位置し、周辺には自然が多く残る風光明媚な場所である。校区は福田地区と宇生賀地区からなり、宇生賀地区の「埋もれ木」は有名である。

○　福田金社地区に古くから伝わる神楽舞は出雲神楽を発祥としながら独特のリズムのお囃子に特徴がある。現在、伝承者が数名となったが、本校生徒には熱心に指導していただいている。

○　主産業は農業であるが、就業者数の減少に伴い、集落営農等の取り組みが推進されている。阿武町農村青年協議会（地元の農業従事者の有志団体）や保護者、地域の方に講師として農産物の生産・加工に関する指導をしていただいた。

③　連絡先

○　〒７５８－０６１１
阿武郡阿武町大字福田下
１５５６番地の３

○　電　話：０８３８８－５－００１５

○　ＦＡＸ：０８３８８－５－０６５２

○　ホームページ：http://www.haginet.ne.jp/users/fukuga-j/

○　電子メール：fukuga-j@haginet.ne.jp

体　験　活　動　の　概　要

①　活動のねらい

○　文化や芸術にかかわる活動

・　自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、問題解決する姿勢を育てる。

○　勤労生産にかかわる体験活動

・　郷土でできる農産物の特徴を知り、生産の喜びや農作業の厳しさを学ぶ。

○　自然にかかわる体験活動

・　人とのふれあいや意見の交換を通して、自他との共感や共生のできる人間性を育てる。

○　職業・就業にかかわる体験活動

・　働くことの意義や職業に対する意識を高め、望ましい職業観や勤労観を養う。

②　活動内容と教育課程上の位置付け

○　文化や芸術にかかわる体験活動

・　ふるさと学習「神楽舞」

（全学年：総合的な学習の時間３０時間）

○　勤労生産にかかわる体験活動

・　そばと大豆の生産、加工

（１年：総合10時間、技術・家庭14時間）

（２年：総合14時間、技術・家庭10時間）

（３年：総合的な学習の時間２４時間）

○　自然にかかわる体験活動

・　阿武中学校との交流学習

「海浜清掃」

（全学年：特別活動４時間）

「スキー教室」

（１，２年：特別活動６時間）

○　職業・就業にかかわる体験活動

・　職場体験学習

（２年：総合的な学習の時間１６時間）

1　活動に関する学校の全体計画

（１）活動のねらい

ふるさとの伝統芸能である神楽舞やお囃子の技術を身に付ける文化的な体験活動、清ヶ浜の鳴き砂の保全を目的とした海浜清掃や冬場の雪が多い土地柄を踏まえたスキー教室といった自然にかかわる体験活動、地元の主産業である農産物の生産・加工を行う勤労生産にかかわる体験活動、近隣の事業所で行う職場体験学習を中心とした職業・就業にかかわる体験活動など、さまざまな体験活動を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考える力を、また、指導者の方の姿を通して、自分の生き方に向き合い、将来を真剣に考える姿勢を育てていく。同時に、観察する、聞く、体験する、分析する、まとめる、表現する、という一連の流れから学び方やものの考え方を身に付け、本校生徒の課題である相手を意識して的確に表現する能力の育成をねらいとしている。

（２）全体の指導計画

主な活動の計画　　対象学年：１～３年生　　年間総時間数　８０時間						
学年	体験活動の種類・内容	期間・日数 単位時間	教育課程上の位置付け	活動の場所	活動の対象	指導者
全学年	文化や芸術にかかわる体験活動 「ふるさと学習（神楽舞）」	5月~7月2時間×9回 ＝18時間 9月~11月2時間×5回 ＝10時間 11月~2月2時間×1回 ＝　２時間	総合的な学習の時間	本校 体育館	文化	地域の神楽保存会の方 本校教員
	勤労生産に関わる体験活動 「そばと大豆の生産・加工」	6月~7月2時間×2回 ＝　４時間 9月~10月2時間×6回 ＝12時間 11月4時間×2回 ＝　８時間	総合的な学習の時間 ＋ 技術・家庭	校舎裏の畑 本校調理室	自然	阿武町農村青年協議会 保護者
全学年 １，２年生	自然にかかわる体験活動 「海浜清掃」 「スキー教室」	６月 ４時間 ２月 ６時間	特別活動 特別活動	清ヶ浜 十種ヶ峰青少年野外活動センター	自然 自然	役場民生課職員 野外活動センター職員
２年生	職場・就業にかかわる体験活動 「職場体験学習」	６月～１０月 事前　４時間 事後12時間	総合的な学習の時間	阿武町 萩市各事業所	事業主客	各事業所担当者

２　活動の実際

実践事例「そばと大豆の生産・加工」

（１）事前指導

前年度末の学校支援委員会での話し合いの結果を踏まえ、５月に校長・教頭と担当教員が阿武町農村青年協議会の方とともに大豆・そばの生産・加工体験の具体化について協議した。現代の農業は機械が進んでいることから農業機械を使った活動が仕組めないか検討したが、作業内容と畑の広さの関係から困難であるとの結論に至った。したがって、鍬・鎌等の道具を使った手作業で行うこととした。

生徒に対しては、４月当初の合同学活の際に今年度の総合的な学習の時間の活動に関するオリエンテーションを行い、新たに「そば・大豆の生産・加工」が加わったこととそのねらいについて説明した。その際、生徒たちに家庭での農作業体験の有無について調査したところ、ほとんどの生徒が未経験であった。

（２）活動の展開

活動は、原則として２時間を一単位として行った。年度当初におよその活動日程は組んだが、天候に左右されるため、活動予定日の一週間前頃から指導者の方との日程調整を行い、活動した。

①　「畑作り（畝立て）」…事前に指導者の方にトラクターで鋤いていただいた畑（休耕田）に鍬を入れ、十本ほどの畝を立てた。平鍬を初めて使ったという生徒が多く、うまく土を裁けずに苦労している姿が見られた。鍬が全員分はなかったこともあり、上手にできる生徒が他の生徒に教えるといった姿も見られた。

②　「種の植え付け」…畝を立て終わったあと、種の植え付けを行った。植え付けといっても種は土に埋め込むのではなく、ほとんど土に播くようにし、軽く土をかぶせるだけでよい、と指導者の方から助言をいただいた。生徒たちはそのような状態で本当に芽が出るのか不安だったようだが、実際には、つい、深く埋めてしまった種が芽を出さなかったことから、植え方の重要性を実感していた。

③　「草取り」…種の植え付けから一か月後と夏休み明けに草取りを行った。そば・大豆以上に生長した草は、土壌が違うためか花壇の草とは違って根がしっかりとはびこり、草取りに悪戦苦闘した。生徒たちは農家の人たちの苦労を痛感していた。

④　「刈り入れ」…本来なら、刈り入れたらしばらく天日干しをしたあと脱穀するところだが、天候が危ぶまれたため、すぐに脱穀し、採れた実を室内干しすることにした。バケツ一杯程度の種から８０ｋｇ以上もの大豆がとれた（そばも同様）ことに、生徒たちは一様に驚くとともに、苦労して収穫することの喜びを感想として挙げていた。

⑤　「そば作り」「豆腐作り」…そば作りでは、保護者・地域の方を指導者に招き、実践を交えて指導していただいた。また、豆腐作りでは、地元の豆腐作りグループの工場でさまざまな機械を使いながら一通りの行程を体験した。そば・豆腐ともに加工後は試食をした。自分で育て、収穫したものを食品として口にすることができたことに対する喜びはひとしおであり、改めて「食」「命」の大切さを実感した。

（３）事後指導

各活動ごとの振り返り用紙は翌日までに提出させ、担当教師が記入内容を点検し、生徒の変容をつかむことに生かした。また、食品加工体験が終了した時点で、一年間の体験活動の振り返りを書き、体験を通して学んだこと等についてじっくり振り返らせた。

３　体験活動の実施体制

（１）学校支援委員会

①　学校の推進体制

活動計画・実施方法については、校長・教頭・教務主任・研修主任で構成する研修推進委員会が起案し、職員会議で検討した。それぞれの活動については、主担当を配置し、役割分担をした。渉外関係については、教頭が主に対応し主担当との調整を行った。

②　学校支援委員会

福賀中学校育友会長、副会長、阿武町農村青年協議会員、阿武町役場福賀支所長、福賀中学校校長、教頭、教務主任、研修主任で構成し、学校、家庭、地域の連携のあり方、地域素材の教材化のあり方、地域の人材の発掘及びネットワーク化について検討した。

（２）配慮事項等

鍬、鎌を使った作業では滑って事故につながらないよう素手で行うように、他の畑作業では軍手を使うように指示した。そば・豆腐作りの際は、エプロン・マスク・三角巾の着用と手洗いを徹底し、衛生面に配慮した。

４　体験活動の評価の工夫と指導の改善

体験活動のあとには、振り返り用紙を渡し、各個人で活動を振り返ることができるようにした。担当教員と各担任が生徒の記入したものに必ず目を通し、次の活動の際の生徒の指導に役立てた。なお、教師にも体験活動について取組を終えての気づきを書いてもらい、以後の活動に生かすようにした。

５　活動の成果と課題

（１）成果

天候に左右されながら、時には雨の中での草取り作業などがあり、生徒たちは改めて農作業の厳しさを実感した。と同時に、日照り続きの厳しい環境の中でもしっかりと実を結んだ大豆・そばを収穫した際には、収穫の喜びを十分感じることができたようである。脱穀の際には、一粒の豆でも転がっていったものは拾うなどの行動や「もったいない」という声を生徒の口からたくさん聞くことができた。

（２）課題

活動の評価として生徒には毎回の活動ごとに振り返りをさせた。教師側にとって生徒の意識の変容をつかむのにはたいへん有効であったが、それらの評価をなかなかうまく生徒に返すことができなかったのが大きな課題である。

さまざまな体験活動を、どのようなねらいをもって取り組むかも重要であるが、どのように評価していくかを今後は意識して取り組んでいかなければならない。